

# ブラウンスが報告した東京の露頭

中島 礼<sup>1)</sup>・加瀬友喜<sup>2)</sup>・川辺文久<sup>3)</sup>

ダーフィット・ブラウンスは1879年にドイツから東京大学にお雇い教師として赴任したエドムンド・ナウマンの後任教授である。ブラウンスは赴任後、東京・横浜周辺の地質調査を行い、東京の王子、駿河台、品川における武蔵野台地東部の地層から貝化石の産出を報告した(Brauns, 1881)。王子の貝化石産地は北区滝野川地区の石神井川河岸で、現在は音無さくら緑地の公園内の崖として現在も保存され観察できる。この産地周辺の貝化石層は王子貝層と呼ばれ、かつては“東京層”の模式地とされた。



写真1 ブラウンス夫妻とその弟子たち  
ナウマンやブラウンスは多くの地質学者を育て、地質調査所の設立に大きな貢献をした。前列左から2番目がブラウンス、後列左から5番目が地質調査所2代目所長の巨智部忠承、7番目が3代目所長の鈴木 敏。地質調査所百年史編集委員会編(1982)から転載。



写真2 音無さくら緑地  
石神井川は戦後に河川改修されるまでは蛇行を繰り返す河川で、強くくびれた部分では溪谷のような地形をつくっていた。音無さくら緑地はこの溪谷状の地形を利用した公園で、かつての流路の攻撃斜面側に崖が続いている。

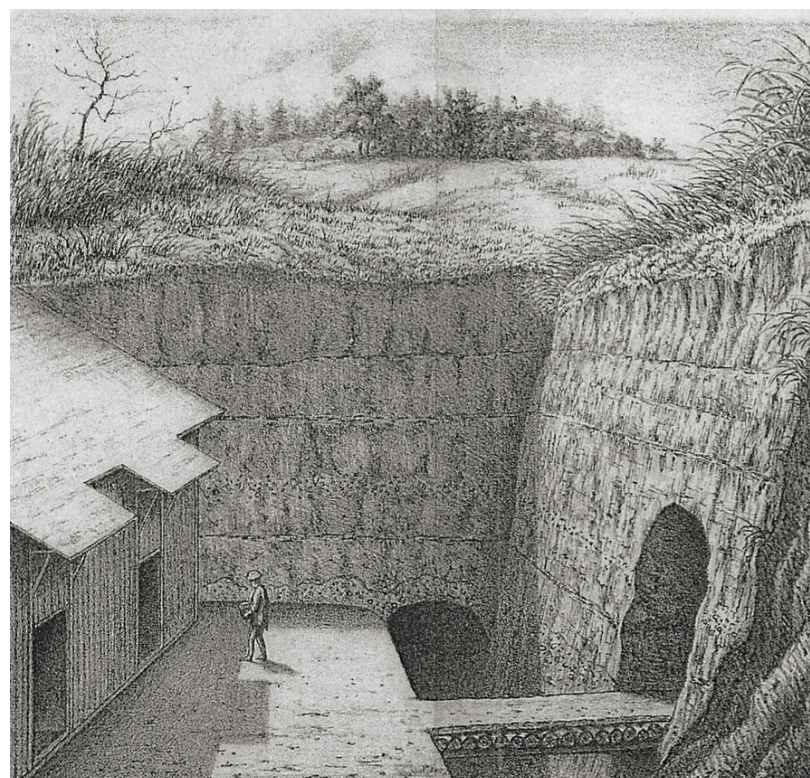


写真3 王子貝層が報告された露頭  
露頭のそばには米搗きのための水車小屋があった。Brauns (1881)から転載。

1) 産総研 地質調査総合センター 地質情報研究部門 2) 神奈川大学 3) 文部科学省



写真4 音無さくら緑地のブラウンスが報告した露頭  
緑地内には約6mの崖があるが、全体的に草や苔で覆われており、一部の地層しか観察できない。崖の下部約3mにシルト～砂質シルト層(写真5)が観察できる。露頭の解説板(写真6)も設置されている。



写真5 露頭下部のシルト層  
Tokunaga (1906) によれば、貝化石層はシルト層よりも下に位置すると想定される。しかし、その層準は現在土砂が堆積しているため確認できない。写っている地層の層厚は約1m。



写真6 露頭に設置された解説板  
解説板には、石神井川の蛇行部分の地図や Brauns (1881) が図示した王子貝層の貝化石が図示されている。



写真7 ブラウンスの名前が付いた二枚貝  
Tokunaga (1906) は、王子貝層から見つかった新種二枚貝をブラウンスに因んで、ブラウンスイシカゲガイ (*Cardium braunsi* Tokunaga) として記載した。写真(中央の個体)は同じ地区から見つかった国立科学博物館登録標本。

## 文献

- Brauns, D. (1881) Geology of the environs of Tokio. *Memoirs of the Science Department, Tokio Daigaku*, no. 4, 1-82, pls. 1-8.
- 地質調査所百年史編集委員会編 (1982) 地質調査所百年史. 通商産業省工業技術院地質調査所創立 100 周年記念協賛会, つくば, 162p.
- Tokunaga, S. (1906) Fossils from the environs of Tokyo. *Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo*, 21, 1-96, pls. 1-6.